

## 再帰性の神話\*

——社会的構築主義の可能性と不可能性——

田 中 耕 一\*\*

かつてエミール・デュルケームが、その初期の著作である『社会分業論』のなかで、「集合意識」の観点から、それを傷つけるものとして犯罪を定義したことは、よく知られている<sup>1)</sup>。そこでは、あらゆる犯罪に共通する性質は、その内在的な特性にあるのではなく、むしろ「外部にある何らかの条件との関係」のなかにある<sup>2)</sup>こと、そしてその「外部にある何らかの条件」とは、とりもなおさず「集合意識」であり、犯罪に対して刑罰を課すのは、その「集合意識」の担い手たる社会にほかならないとされた。

しかしタルコット・パーソンズによれば、他方で、デュルケームの強い実証主義的な傾向は、主観的要素の含みをもつ「集合意識」の概念を、「社会的なもの」に重ね合わせることを困難にする強い圧力を産み出した。言うまでもなく、デュルケームにとって、「社会的なもの」は、個人に対して外在し、個人を拘束するものでなければならなかったからだ。その結果、「社会的なもの」は、長らく残余カテゴリーとして扱われた。しかしながら、パーソンズによれば、最終的にデュルケームは、「社会的なもの」と主観的要素を結びつける方向へと進み、初期の発想に立ち戻った。

この基本的論点において、…デュルケーム

の展開が完全な円環を描いているのは、奇妙なことである。…かれは、共有された主観的要素という考えでもって出発した地点へと舞い戻った。(Parsons 1937: 360=1982: 85)

したがって、パーソンズが「社会的なもの」として抽出するのは、主観的であると同時に、決してランダムなものではなく、社会的に統合された究極的価値システムへと接合され、集合生活の創発特性に対応する「規範的志向」なのである<sup>3)</sup>。

いずれにしても、ここで注目しておきたいのは、行為者の「主観的な意味」という、もう一つの社会学的伝統に根ざす行為論は言うにおよばず、いわゆる規範主義的な行為論においても、規範は、決して行為に外部的・外在的な何ものかではないということである。われわれはここで、規範主義的な行為論を擁護するつもりもなければ、批判するつもりもない。大事なことは、少なくともデュルケームの言う「外部的な関係」というものをつきつめて考えるかぎり、それが統合されていようと、相互に葛藤していようと、価値や規範を含意するものではありえない、ということだ。言い換えれば、行為の内在的な特性（行為の要素）として、社会性をあらかじめ取り込んでしまいかぎり、本来の意味での「社会的なもの」は、

\*キーワード：再帰性、社会的構築主義、社会問題

\*\*関西学院大学社会学部教授

- 1) 「われわれは、ある行為が犯罪的であるのは、それが集合意識の強く、確定的な状態を傷つける場合である、とすることができよう。……この条件を満たす [すべての犯罪に共通する] 唯一の特性は、犯罪と集合的感情の間に存在する対立である。したがって、犯罪を構成するのは、この対立であり、犯罪からこの対立が生じるのではない。言い換えれば、ある行為は、それが犯罪的だから、集合意識を害すると言すべきではなく、そうではなくて、それが集合意識を害するから犯罪的であると言すべきなのだ。われわれは、ある行為が犯罪であるから、それを非難するのではなく、われわれがある行為を非難するから、それは犯罪なのである。」(Durkheim 1933: 39-40=1989: 141-3)
- 2) 「…犯罪にみられる変化しない性質は、…行為の内在的特性のなかに見い出されるのではなく、…行為の外部にある何らかの条件との間に取り結ばれる関係のなかに見い出されるのだ。」(Durkheim 1933: 32=1989: 129)
- 3) 主意主義的行為論のわかりやすい見取り図としては、Parsons (1937: 697-726=1989: 91-132) を参照。

はじめから失われてしまうのである<sup>4)</sup>。

その意味で、行為者の「主観的な意味」であれ、「規範的志向」であれ、行為のいわば内在的要因説に対して、デュルケームの言う「外部的な関係」の本来的なありようを提示したのは、逸脱についてのレイベリング理論であったと言ってよい。ハワード・S・ベッカーは、以下のように述べている。

逸脱とは、行動それ自体に属する性質ではなくて、ある行為を行う者と、それに反応する人々との間の相互行為に属する性質なのである。(Becker 1963: 14=1978: 24)

ここでは、逸脱（であるかないか）という行為特性が、行為に内在する視点によって決定されるのではなく、むしろ他の行為（者）との関係のなかで、すなわち当該の行為を含む相互行為のなかで、決定されるものであることが強調されている。もちろんベッカーの立場が、それほど徹底したものではなく、むしろかなり折衷的なものであったことも、すでによく知られている。実際ベッカーは、上記の文章の直前で、以下のように述べている。

ある行為が逸脱であるかどうかは、ある程度は、その行為の性質（つまり規則を破っているかどうか）に依存し、ある程度は、他の人々がその行為に関して何を行うかに依存している。(Becker 1963: 14=1978: 23)

したがって、その後のレイベリング理論が、実証主義的な逸脱行動論との論争<sup>5)</sup>に巻き込まれ、いつのまにかその輝きを失っていくという運命は、すでにその端緒のなかに、十分にうかがうことができる。しかしもしそうだとするならば、厳密な意味で「社会的なもの」の水準を切り出し、そ

れによって社会学的思考の独自性を確保しようとした、デュルケーム以来の努力は、いったいどうなってしまうのだろうか。今日、この問題を改めて考えるための足掛かりは、いったいどこにあるのだろうか。レイベリング理論の果たした意義を考慮に入れば、まさしくその後継者である（社会問題の）社会的構築主義を、一つの候補として挙げることは、正当なものと言えるだろう。

本稿の目的は、このような観点から、社会的構築主義<sup>6)</sup>の可能性と、そしてまたその問題点（それが根本的な問題であるという意味では、社会的構築主義の不可能性）を明らかにすることにある。もちろん、だからといって、単なる批判のために批判するつもりはない。むしろ、どのような形であれば、社会的構築主義のアイデアが正当な試みでありうるのかを見極めていかなければならない。

## 1. 社会問題の構築主義

まずは、マルコム・スペクターとジョン・I・キツセ (Spector and Kitsuse 1987=1992) に基づいて、「社会問題の構築主義」を復習しておこう。かれらにとって、最も重要な区別は、「われわれが客観的状态 (objective condition) と呼ぶものと、それらを社会問題と定義することとの間の区別」(Spector and Kitsuse 1987: 5=1992: 11) である。

前者は、長らく、広範な社会現象の研究のための基礎を提供してきたのだが、論理的には後者が、社会問題の社会学のための研究対象——ほとんど完全に無視され、探究されてこなかった研究対象——を提供するのだ、とわれわれは主張したい。(Spector and Kitsuse 1987: 5=1992: 11)

4) この論点については、すでに田中 (1990) で詳しく論じた。

5) レイベリング理論をめぐる論争については、Gove (1975) の諸章を参照。

6) 一般に社会的構築主義という場合には、少なくとも、もう一つの大きな勢力である、(社会) 心理学な系譜に属する諸研究 (Burr 1995=1997; Potter and Wetherell 1987; Edwards and Potter 1992; Edwards 1997; Potter 1996; Harré and Gillett 1994; Harré 1999などを参照) も含まなければならないが、本稿では、それらを扱うことはできない。ただし、本稿の結論に関しては、基本的にこれらの諸研究にもあてはまるものと考えている。また、社会問題の構築主義については、すでに中河 (1989-90, 1999) が詳細な紹介と検討を行っている。

したがって出発点は、社会問題を何らかの客観的状态とみなす、伝統的あるいは機能主義的立場への批判である。このような素朴な立場からすれば、社会問題とは、いわば社会の何らかの機能不全であり、社会学者の任務は、それを診断・発見し、その原因や処方箋を探ることにある。

社会問題を何らかの客観的状态とみなすことができないのは、何が犯罪であるかを、行為の性質にしたがって判断できないという、冒頭のデュルケームの洞察からも、十分に推測可能である。何らかの状態や行動を、その内在的な特性にしたがって、社会問題や逸脱と定義することは決してできない。その意味で、このような素朴な立場が維持されうるためには、暗黙に、何らかの論理的な補完が必要になってくるはずだ。多分、その第一は、社会問題を正しく見定める社会学者の専門家としての特権的な能力の仮定であろう。専門家としての社会学者だけが、社会の正常な動作を把握でき、したがってそれに対する機能不全としての社会問題を発見することができる。それは、とりもなおさず専門家の判断の押しつけなのだが、科学（としての社会学）のみが真実を発見しようとする科学主義的な立場をとるなら、このことは問題にならないだろう。

このような専門家の判断の根拠は、言うまでもなく社会学という専門的知識であり、もっと特定するなら、機能主義的な社会学理論である。この理論によれば、社会システムは、自らを維持するために、一定の機能を果たさなければならず、したがって必要な仕方でも機能分化し、それぞれの局面にしかるべき役割が配分され、人々の行為が統制されなければならない。そしてそれを可能にしているのが、制度（規則）であり規範である<sup>7)</sup>。そこで登場するのが、第二の補完——規範主義ないしは規範的定義——である。それは、一般に社会の目標や望ましさを規準となっているようなものばかりでなく、それぞれの地位に制度化された規範（役割）も含めて、規範にしたがっているかどうかを、判断の規準にしようとするものであろう。社会システムが維持されるためには、さまざまな規範が制度化され、内面化されていなければ

ならない。そしてそのような規範にしたがった行動が遂行されることが、社会システムの正常な動作なのだから、そのような規範からはずれるのが逸脱であり、社会問題であるということになる。

もっとも、スペクターとキツセは、この第二の補完である規範主義については、アンビバレントな位置づけをしているようにみえる。かれらによれば、規範的定義は、「人々による定義」の萌芽でもある。

二つの規範的アプローチ〔機能的アプローチと価値葛藤アプローチ〕がともに仮定しているのは、状態を問題として定義するのが「メンバーの活動」であるということだ。つまり問題としての定義は、社会のメンバーによって行われる活動であって、社会学者のような専門的な観察者によって行われる活動ではないということである。…社会学者が観察すべきなのは、状態ではなくて、人々がその状態に対して、どのように行動するかである。社会学者は、単に状態を観察して、それが社会問題であるかどうかを判断することはできない。(Spector and Kitsuse 1987: 34 = 1992: 54)

いずれにしても、ここで提起されているのは、社会学者による、専門的知識に基づいた社会問題の「発見」ではなく、社会問題を社会のメンバーによってなされる定義という視点からみていこうとする立場である。そして、客観的な状態と、その状態を社会問題として定義することを区別し、社会のメンバーによる価値判断（その背景には規範がある）こそが、ある社会状態を社会問題たらしめているのだ、と明確に主張したのは、価値葛藤学派であった。

かれら〔価値葛藤学派〕は、社会問題とは、社会のメンバーによって構築された定義であり、こうした構築物は価値判断の表現である、と言っているようにみえる。社会問題として状態を定義することは、社会のメン

7) 機能主義的な社会システム論の典型として、Persons (1951=1974) を参照。

バーによる達成なのだ。(Spector and Kitsuse 1987: 43=1992: 67)

しかしながら価値葛藤学派ばかりでなく、社会的構築主義の直接の祖先である、逸脱のレイベリング理論もまた、一方で定義主義的アプローチを提起しながら、他方で客観的状態の概念に引き戻され、客観主義との折衷に陥ることによって、その独自性を曖昧にしてしまったとされる。

スペクターとキツセによれば、エドウィン・レマートの客観的に規定される「一次的逸脱」と、それに対する社会的反作用によって引き起こされる「二次的逸脱」という概念も、そしてまたベッカーの逸脱行動の類型学（メンバーのパースペクティブ=逸脱者として認知された/逸脱者として認知されない、という軸と、独立した観察者のパースペクティブ=規則違反/規則に沿った、という軸によって構成される四つの類型）も、同様に、一方における客観的な状態としての逸脱行動と、他方における社会的反作用やメンバーによる認知・評価とを並記することによって、客観主義的アプローチと定義主義的アプローチという相反する二つの要素を折衷的に含んでいる。

社会問題の社会学は、社会のメンバーのパースペクティブを出発点とし、とくに、社会問題を定義しようとするクレーム申し立て活動に照準しなければならない…。…社会問題や逸脱を研究する社会学者は、社会の状態をどのように定義し、それについて何がなされるべきかに関してなされる、クレームを申し立てるグループと他のグループとの間の相互作用を関心の中心に据えるべきだ、とわれわれは提案する。(Spector and Kitsuse 1987: 72=1992: 112)

スペクターとキツセによれば、「クレーム申し

立て活動」とは、何らかの「想定された(putative)状態」に関する不満や要求を主張する、個人やグループの活動であり、社会問題とは、まさにそうした活動によって社会的に構築されるものにほかならない。したがって社会問題の社会学の主題は、人々が行う「クレーム申し立て活動」そのものであって、客観主義的アプローチとは違って、申し立てられたクレームの真偽(つまり「想定された状態」が本当に存在するかどうか)は問題にならない<sup>8)</sup>。

## 2. 構築主義論争(1)「オントロジカル・ゲリマンダリング」をめぐって

スペクターとキツセによって提起された、社会問題の構築主義的なアプローチに対して、最も影響力の大きい批判を展開したのが、ステイブ・ウールガーとドロシー・ポーラッチによる「オントロジカル・ゲリマンダリング(ontological gerrymandering)」という批判である(Woolgar and Pawluch 1985=2000)。ここでは、この批判と、それに対する構築主義の側の対応について見ておこう。

ウールガーとポーラッチによれば、社会問題の構築主義は、社会問題を何らかの客観的な状態とみなす伝統的思考から決別し、社会問題を社会のメンバーが定義し、構築する活動(クレーム申し立て活動)として見ていこうとしているのだが、それにもかかわらず「これらの研究はみな、根本的な意味で、決してその真理値が問われることのないクレームを自分自身で申し立てている」(Woolgar and Pawluch 1985: 215=2000: 20)。つまり構築主義者自身が、その看板とは裏腹に、客観的な状態についてのクレームを申し立ててしまっており、その意味で、自らが批判している、あるいは分析の対象として自らとは一線を画しているはずの、客観的な状態についてのクレーム申

8) 規範主義の位置づけの問題について、少しだけ触れておこう。冒頭で述べたように、規範は、行為にとって内在的なものでありうるから、規範主義と定義主義の区別をあいまいにすることは、あまり望ましいことではない。定義主義と規範主義との折衷は、クレーム申し立て活動の背後に、集団や個人の価値判断や規範を想定するという形であらわれる。スペクターとキツセは(いわゆる「コンテクスト派」とは違って)、価値や利害を、人々がクレーム申し立てを行う際に使用する「資源」として位置づけることで、この問題を慎重に排除しようとしている。

し立て活動を、自ら行ってしまっているというのである。

[構築主義的な] 事例研究はみな、同一の二部構成を示している。第一に、何らかの行動や状態が呼び出され、それに結びついた異なる反応（定義やクレーム）の像が提示されることによって、説明が開始される。第二に、各研究は、そうした定義の変容を説明するために、有力と思われる社会的・歴史的状況の諸特性を呼び出すのだ。(Woolgar and Pawluch 1985: 215=2000: 20)

例えば、「マリファナ」を「嗜癖的」なものとして定義するかどうかという定義上の変化に注意を促し、その変化が説明を要する現象であると語るときに、その背後で「マリファナの性質」の不変性が仮定されたり、あるいは、「子どもを殴ること」を「児童虐待」として定義するかどうかという定義上の変化に注意を促し、その変化を社会的・歴史的状況によって説明しようとするときに、「子どもを殴ること」が、いつの時代も大きな変化なく行われてきたという、客観的な行動や状態についての定義が、明示的であれ、暗黙にであれ、下されているというのである。「子どもを殴ること」が、「児童虐待」として定義されるかどうかは、客観的状态についてのクレームとして扱われているのに対して、「子どもを殴ること」というのも、客観的状态についてのクレームなのだということは、無視されている。

「子どもを殴ること」は、「児童虐待」に比べて、より客観的な状態に近い用語であるという印象を与えるかもしれないが、しかしながらそれも、ラベルあるいは構築物なのだ。だがフォールの説明は、「児童虐待」というラベルを提案する人々の構築作業には注意を向けさせながら、「子どもを殴ること」というラベルは自明視するよう、読者に要求している。(Woolgar and Pawluch 1985: 220=2000: 32)

ウールガーとポーラッチによれば、このような

説明様式においては、一方における状態の不変性と、他方における定義の変容性が対照化されている。つまり、状態は変化しないにもかかわらず、状態の定義の方は変化しており、それは、何らかの社会的状況（の変化）の結果であるとされる。たしかに、状態が変化しないというのは、客観的な状態についての一つの判断である。社会的構築主義の方針にしたがえば、客観的な状態についての判断は、差し控えなければならないはずなのに、実際には、それが行われている。社会のメンバーの判断は、クレーム申し立て活動として扱われているのに、自分たちのしている判断は、同様にクレーム申し立て活動であるにもかかわらず、隠蔽されているというのだ。問題であると理解されるべき前提と、そうでない前提との間に、このような恣意的な境界線を引くこと、あるいは、ある領域は存在論的な疑いに適うものとして、別の領域は存在論的な疑いを免れるものとして描かれることが、「オントロジカル・ゲリマンダリング」と呼ばれる。

構築主義的なアプローチは、客観的な状態について直接的に語ろうとする伝統的アプローチを批判して、それについての人々の定義や構築のあり方や過程を研究の主題にしようとするのだが、そのような主題を際立たせるために、その背後で、客観的な状態についての判断を下さなければならなくなっているということだ。その意味で、定義主義的アプローチもまた、それが批判し、決別しようとするものから抜け出すことはできず、それと同列に並ぶものでしかない。言い換えれば、構築主義もまた、人々のクレームと同列であるのに、構築主義を自らに適用しないことによって、社会学的な分析としての自己の地位を確保しようとしているというわけだ。ここまで議論が拡張されるなら、社会的構築主義の立場にたつ分析のみならず、あらゆる分析が、何らかの意味で、状態を定義するようなクレームを申し立てているはずだから、かれらの批判は、すべての社会学的分析や説明にあてはまることになる。

このようなウールガーとポーラッチの批判に対応する形で、構築主義の陣営は、この批判に対応しようとする、いわゆる「厳格派」と、そうでな

い「コンテクスト派」に分かれていく。ここでは、「厳格派」のピーター・R・イバラとキツセ (Ibara and Kitsuse 1993=2000) の議論を検討しよう<sup>9)</sup>。

イバラとキツセが何よりも強調するのは、社会のメンバーと、社会学者の区別であり、社会のメンバーによる実践的な企てと、社会学者による分析的・理論的な企ての区別である。かれらは、それによって、構築主義的分析が、客観主義的分析と同列ではなく、いわば論理的に異なったレベルにあるということを示そうとする。

このような主張の背景にあるのは、アルフレッド・シュッツ (Schutz 1962=1983) の議論であり、それに基づいたドン・ツインマーマンとアルヴィン・ポルナー (Zimmerman and Pollner 1971) の議論である。シュッツは、以下のように述べている。

それ [社会的世界] は、そこで生き、思考し、そして行為している人々にとって、特有の意味とレリバンスを持っている。かれらは、この世界を、日常生活の現実についての一連の常識的な構築物によって、あらかじめ選択し、あらかじめ解釈している。…社会学者によって構築された思惟対象は、日常生活を生きる人の常識的な思考によって構築された思惟対象に言及し、またそれに基づいている。したがって、社会学者によって使用される構築物は、いわば第二次的なもの、すなわち社会的な場面にいる行為者によってつくられた構築物についての構築物なのであって、そういう行為者の行動を、科学者は…観察し、説明しようとするのだ。(Schutz 1962: 6=1983: 52)

メンバーによる常識的な意味構成である第一次的構築と、その第一次的構築を対象とした、社会学者による科学的な意味構成である第二次的構築を区別するという考えは、ツインマーマンとポルナーによって、社会学的探究の「主題 (topic)」と「資源 (resource)」の区別という形で再定式

化される。かれらによれば、社会学的探究は、社会の普通のメンバーによって、常識的な仕方でも、認知されたり記述されたりする現象に向けられているのだが、「…そうした常識的な認知と記述は、それによって利用可能になった現象を、社会学者が分析するための根本的に疑問視されない資源として利用されてしまっている」(Zimmerman and Pollner 1971: 81)。

もちろん一般に、社会学的研究は、常識的な認知や記述に対してかなり批判的な態度をとることが多いのだが、それは、常識的に認知されたり記述された現象・対象・状態などが、認知や記述という営みとは独立に、客観的なものとして存在しているという前提にまでは及ばない。むしろそのような前提は、実証主義的な社会学の前提そのものでもあって、したがって常識的知識に対する批判は、あくまでその前提の上でなされる常識的な説明に対するものである。したがって、常識的な認知や記述が、いかにして何らかの現象・対象・状態を客観的に実在するものとして構築するのか、という問題が視野からはずれてしまう。その意味で、「日常生活の世界は、…それ自体として、主題となることはほとんどな」(Zimmerman and Pollner 1971: 80) く、社会学は、本来主題として取り組むべきものを、そうしないで、自らの説明実践のための資源として利用してしまっているというのである。

われわれが提案するのは、メンバーの実践的探究の主題への伝統的な関心を留保し、素人のものであれ職業的なものであれ、実践的探究それ自身への研究に、もっぱら重点を置くよう促すことである。(Zimmerman and Pollner 1971: 83)

ここまでくれば、社会のメンバーによる実践的な第一次的構築と、社会学者による分析的・理論的な第二次的構築を区別し関係づけようとする、以下のようなイバラとキツセの主張は、ごく自然な流れのなかにある。

9) 「コンテクスト派」の主張については、Best ([1989]1995, 1993) を参照。

メンバーと社会学的分析者を区別することが重要なのは、構築主義者が次のような見解を持っているからである。つまり、メンバーが言語的な生産物と活動（シュッツの用語で言えば、第一次的構築）を提供することにより、今度は社会学者がそれを（実践的なものと対立するものとしての）理論的な吟味（すなわち第二次的構築）にかけることができる、というものだ。社会問題とは、メンバーのさまざまな方法からなる社会的相互行為のクラスの方を指しており、その方法は、シンボリックに構築され、道徳的に非難される相互主観的な存在を定式化したり、記述したり、解釈したり、評価したりするための方法であって、しかもそれは、社会学者によって、分析的に再構築可能なものなのである。（Ibarra and Kitsuse 1993: 28=2000: 52）

たしかに、社会的構築主義に対するウールガーとポーラッチの直接的な批判は、構築主義者が、その看板とは裏腹に、客観的な状態についてクレームを申し立てており、その意味で、かれらが分析の対象としている、社会のメンバーによるクレーム申し立て活動と結局同じなのだ、ということにあるのだから、メンバーによる構築と、社会学者（構築主義者）による構築とを、性質上区別した上で（実践的と理論的・分析的）、再帰的に関係づける（構築の構築）というアイデアは、たしかに理解可能である。それと同時に、全く同じことなのだが、何とか客観的な状態から身を引くことが必要になり、そのような観点から、「想定された状態」を「状態カテゴリー（condition-category）」という概念で置き換えようとすることも、理解不可能ではない。

状態カテゴリーは、社会的な活動や過程の類型——つまり「社会」による自らの内容の分類——であり、それが実践のコンテクストで使用されることによって、社会的現実の意味ある記述や評価が産み出される。…状態カ

テゴリーは、社会問題が何に「ついて」のものであるのかを示すために、メンバーが使う用語であり、…第一にそしてもつばら、言語の単位なのだ。（Ibarra and Kitsuse 1993: 30=2000: 56）

これによってたしかに、メンバーの構築が言及している「客観的な状態」は、少なくとも分析者による再構成（第二次的構築）のなかでは、言語的なもの、つまりメンバーの構築に内在的な要素に置き換えることができる。したがって、メンバーの構築に含まれる「客観的な状態」への言及を、構築主義者の二次的な構築が間接的に引き受けることは防げるかもしれない。しかしながら、むしろウールガーとポーラッチの批判は、そもそも可変的な構築について語るためには、構築される側の「客観的な状態」の同一性を、構築主義者自身が直接に仮定しなければならない、と述べているのだから、その点では、あまり有効な反論にはなっていない。もちろん、「コンテクスト派」はともかく、「厳格派」は、構築の可変性を少なくとも明示的に主張することはないし、純粹に社会的構築の過程（言説実践）それ自身のみを記述するのだと言うことは、可能かもしれない。しかしながら、その場合、そこには、明らかな研究対象のシフトがあり、問題設定の水準のシフトがあるように思われる<sup>10)</sup>。だからこそ、社会のメンバーの構築は、構築主義者にとっての「客観的な状態」であり、やはり客観的な状態についての判断をさけることはできないではないか、という批判も出てこざるをえない。

われわれは、ここで、「だから客観的な状態についての一切の判断を排除しうる言説を工夫しなければならない」と主張するつもりはないし、逆に「そんなことは不可能だから、こんな批判は無視してよい」と主張するつもりもない。むしろ問題にしなければならないのは、われわれにこのような不可能な選択を迫っている前提そのものだと言うべだろう。すなわち、構築主義者の研究が、メンバーの構築作業を対象とした第二次的な構築

10) それは、あくまでディスコースやレトリックの研究であって、社会問題の研究の一部ではあるとしても、それこそが社会問題の研究であるということには、やはり躊躇を感じざるをえない。この点についての詳しい議論は、本稿の第4章を参照。

であるという、再帰的なアプローチそのもののなかにこそ、問題があるのではないか——このような前提が、あたかも不可能な選択が存在しているかのような見せ掛けをつくり出しているのではないか——ということだ。

### 3. 構築主義論争(2) 再帰性についての異なる立場

イバラとキツセによる構築主義の再定式化に対して、ここで検討するポルナー (Pollner 1993) と、デビッド・ボーゲンとマイケル・リンチ (Bogen and Lynch 1993) の議論は、少なくとも「再帰性 (reflexivity)」<sup>11)</sup> の問題に関して、正反対の評価を下しているように見える。ポルナーは、社会問題の構築主義が、「再帰性に照準して、『客観主義』の立場から決定的に決別」(Pollner 1993: 199) するものであるとして、肯定的に評価しつつも、再帰性の問題が、依然として十分ラディカルには取り扱われていない、と主張する。それに対して、ボーゲンとリンチは、そもそもメンバーの構築と社会学者の構築を区別し、それを再帰的に関係づけようとするアイデア自体を問題視している。かれらにとって、再帰性は、少なくともそれによって、何らかの認識(論)的な利点が産み出されるようなものではない。

ポルナーは、構築主義を「市井の (mundane) あるいは客観主義的形式」と「構成的 (constitutive) 形式」に区別し<sup>12)</sup>、さらに後者を「主題的な (topical) 構築主義」と「分析的な (analytical) 構築主義」に区別する。

構築主義の「市井のあるいは客観主義的な形式」は、分析的に特定可能な客観的な秩序を前提としており、そのような前提のもとでは、構築主義は、客観的な秩序の「主観的」あるいは「解釈的」側面を取り扱うものとして位置づけられる。したがって客観主義的構築主義にとっては、そもそも再帰性など、問題にならない。

それに対して、構築主義の「構成的な形式」は、一方における定義的、解釈的、あるいは表象的な実践と、他方におけるそのような実践が定義し、解釈し、あるいは表象している客観的な対応物との区別を(判断)停止し、括弧に入れなければならない。しかしながらポルナーによれば、構成的な形式といっても、そこには射程の違う二種類の形式がある。「主題的な構築主義」が客観主義的前提を(判断)停止するのは、あくまで探究の主題を定式化する際においてだけであり、探究の主題としての社会的現実が、解きがたく実践やディスコースとからまりあっていると同時に、それらを通して構成されていると考えることによってである。

客観主義的な区別——「客観的に定まったもの」と、単にラベルを貼られたり、定義されたり、知覚されたに過ぎないものとの区別——は、それ自身、主題の領域の内部にある。そうした区別は、人々によって前提とされ、志向され、実演されるかぎりで関心を払われるのだが、それが主題を枠づけしたり、形成したりするための分析的な資源となっているということには関心が払われない。(Pollner 1993: 201)

したがって「主題的な構築主義」は、分析のレベルでは、依然として客観主義的であるということになる。つまり社会のメンバーの構築的な実践は、分析者によって、事実と対応するように表象されうる客観的な現実であると考えられている。したがって一方で、メンバーは、現実を構成するものとして捉えられているのだが、他方で、分析者は、現実を構成するものとしてではなく、客観的に存在する現実を発見するものとして捉えられている。したがって「主題的な構築主義」は、自らを構築主義的な分析の対象にしていないという意味で、再帰性の問題を十分ラディカルには考え

11) 「再帰性」の概念は実に多様であるが、さしあたりここでは、「(メンバーの) 構築を (社会学者が) 構築する」というような、「何らかの過程の自己適用」と考えておきたい。このような定義については、Luhmann (1970: 93, 1984: 601) を参照。また、この概念の多様な用いられ方については、Lynch (2000) が参考になる。

12) このような区別は、すでに Pollner (1978) のなかで、レイベリング理論に関して展開されたものであり、さらにその原型は、Pollner (1974) までさかのぼる。



ていない。

ポルナーによれば、依然として客観主義の圏内に引き止められていたスペクターとキツセの定式化は、イバラとキツセの修正によって、「主観的な構築主義」として再定式化された。この修正版にとって、客観主義的な区別や客観主義的なディスコースは、社会問題が構築される、メンバーの言語ゲームの特性として理解されるようになる。さらに、「想定された状態」の概念を「状態カテゴリー」の概念で置き換えることによって、かれらが強調しているのは、その用語が客観的現実への間接的な言及ではなくて、そのような言及が社会問題をめぐるディスコースのなかで使用されているという認識である。

しかしながら、イバラとキツセは、自らの実践を考察の対象から除外している。「主観的な構築主義」の実践そのもの、つまり構築主義者のクレイム申し立て活動は、ディスコースやレトリックからは独立したものと考えられている。したがって「主観的な構築主義」は、分析的レベルでは、依然として、十分に再帰的ではないままだというわけだ。

それに対して「分析的な構築主義」の立場にたてば、分析者自身の実践も、社会のメンバーの実践と同様に、構築主義的分析の対象に含まれる。したがって構築主義的分析自体が構築主義的分析の対象になるという意味で、再帰性は、十分にラディカルな形態をとることができる。もちろんポルナーは、このような徹底的な再帰性を導入することが、論理的な困難を抱えていることを認めるが、それにもかかわらず、「再帰性の社会学」は、そのような困難の理由（再帰性は、客観主義的前提のもとでのみ困難なのであって、それ自身として困難なのではない）をも解明できるとし、さらには、再帰性を導入した「新しいディスコースの形式」の可能性を夢想する。

さて、ボーゲンとリンチ (Bogen and Lynch 1993) は、社会的構築主義とエスノメソドロジーとの間に明らかな平行関係を認めたいうで、両者の間の深い相違を強調している。

かれらによれば、イバラとキツセは、行為者の日常的な (vernacular) 理解を、哲学的実在論の

素朴な変種として取り扱い、構築主義者自身の分析が依って立つ地点と区別することによって、社会の普通のメンバーによる、「素朴な自然的理論」の外部に立とうとしている。したがってボーゲンとリンチがまず問題視するのは、日常的ディスコースや日常的理解と、専門的分析や分析的な理解との間に一線を画そうとする、イバラとキツセの基本方針そのものである。

…イバラとキツセの言う混乱 [理論的ディスコースと日常的ディスコースという異なる層の間の混乱] が生起するのは、まず第一に、この層が区別されなければならないという前提のもとである。…したがって社会問題の一般理論がなすべき第一のものは、社会問題の社会学的知識と常識的知識の間に、原理的な区別を設けるための基礎を提供することであるとされる。このようにしてはじめて、「メンバーの社会問題についての常識的知識」が、社会学的分析という仕事のための、純粋な現象として立ちあらわれるのだ。  
(Bogen and Lynch 1993: 216)

たしかに常識的な知識や方法を「資源」として利用することと、それを分析的な「主題」として取り扱うことの区別は、すでに前章で触れたツインマーマンとポルナーの定式化以来、現象学的社会学やエスノメソドロジーの代表的な公式の一つになっている。しかしながらそこには、常識的な知識や方法を主題化することによって、それらを「欠陥のあるもの」「劣ったもの」「誤ったもの」として非難したり、矯正したりするという動機はなかったはずだ。というのも、科学的知識と常識的知識を競合する関係で捉え、前者が正しく、後者が誤っているという考え方に対してこそ、かれらの批判は向けられていたのだから。したがって、常識的な知識や方法を主題化することの本来の意味は、社会学がその研究対象である日常の世界を、その内在的な論理を無視して、「科学的」に説明しようとすることへの批判にあり、したがって日常的世界の内在的な論理の解明こそが、社会学の本来の主題でなければならないという主張にあったはずなのである。

しかしながら、ポルナーからイバラとキツセへと受け継がれている、日常世界の主題化は、むしろ全く逆の方向を向いてしまっている。そこでは、まず第一に、一方における社会のメンバーの実践的あるいは自然的な態度と、他方における社会学者の理論的あるいは分析的な態度が対置され、さらに前者に対しては、素朴実在論的な、あるいは客観主義的な方法論的態度——これは、構築主義からみれば、「誤った」方法的論的態度にほかならない——が帰せられている。そして第二に、社会学者（構築主義者）は、メンバーの自然的態度の外部に立つことによって、メンバーの常識的な知識や方法に対して、「アイロニカルな態度」(Ibarra and Kitsuse 1993: 26-7=2000: 49)をとり、結局のところ、メンバーのクレームを掘り崩すことになる。というのも、それは「誤った」方法的態度に基づいているのだから。

そこでは、ツィンマーマンとポルナーが本来批判したはずの、常識的知識と科学的知識の競合関係が再び姿をあらわしてしまっているし、社会的な専門知識が再び特権化されてしまっている。イバラとキツセは、科学的態度が日常的態度によって誘惑されたり、汚染されたりしないように注意を促しているようにみえるが (Ibarra and Kitsuse 1993: 30-31=2000: 55-57)、本当に注意しなければならないのは、全く反対に、日常的態度が科学的態度によって、誘惑されたり、汚染されたりすることではなかったのか。というのも、元来、科学によって日常的世界の内在的な論理が無視されたり、日常的態度に科学的態度が勝手に投影されたりすることが、問題になっていたはずなのだから。

構築主義の分析は、この「[市井の存在論]や「実証主義的常識」に基づいた]客観的事実性の感覚が、相互行為的に構築され維持されていることを示す。…分析は、素人の行為者であろうと、暗黙にメンバーの前提を採用している社会学者であろうと、メンバーが客観的現実について報告しているクレームを掘り崩しているのだ。(Bogen and Lynch 1993:

222)

その意味で、資源と主題の区別は、もはや一つのドグマと化しているという、ボーゲンとリンチの指摘は正しい。かれらによれば、「自然的態度」と「科学的理論化の態度」を対比することによって、あたかも「自然的態度」の外部に出ることができるかのように考えることはできない。

自然的態度は、あらゆる想像しうる「態度」、つまり科学的、哲学的、そして市井の「態度」を含んでいる、と考えることは、全く道理に適っている。逆に言えば、このことは、自然的態度が多面的な態度を含み、いかなる態度も、全体の配置を見渡す地点を構成することはない、ということの意味するだろう。(Bogen and Lynch 1993: 225)

そうだとすれば、何らかの実践を行うということと、それについて何かを語るというもう一つの実践との関係について、われわれは、どのように考えればよいのだろうか。大事なことは、第二の実践（第一の実践を観察したり記述したりする実践）が、第一の実践に対して、論理階層上、より高次の水準（メタ・レベル）にあると考えてはならないということ、したがって第二の実践は、第一の実践には欠けている何ものかを補い、それによって第一の実践を、より包括的で、より完全な枠組みのなかに統合するようなものではないということである。別の言い方をすれば、第一の実践は、それを観察したり記述したりする、より上位の第二の実践によって補われなければならないとか、それがなければ不完全なものでしかないと考える必要はまったくないし、そもそもある実践を観察したり記述したりすることは、当の実践そのものにとって（つまりそれを適切に行ったり、理解したりすることにとって）、構成的な何ものかではなく、まさに当の実践とは別の新たな実践にほかならないのである<sup>13)</sup>。

13) 実践と実践の観察（解釈）との、このような区別については、田中（2002）で詳しく論じた。

#### 4. 再帰性の神話

すでに指摘したように、一方で、ポルナーは、再帰性というアイデアを全面的に受け入れ、ラディカルな再帰性を取り込んだ理論や言説の可能性について考えようとしているのに対して、他方で、ボーゲンとリンチは、少なくとも、再帰性を認識（論）的な利点と結びつけるという方向性に重大な疑義を申し立てている<sup>14)</sup>。われわれの立場は、基本的には、後者に近い<sup>15)</sup>。というのも、前者の考え方は、多くの問題を抱えているばかりでなく、決定的な誤りを含んでいると思われるからだ。

まず、イバラとキツセによる構築主義の再定式化には、二つの側面があることに注目しよう。第一の側面は、社会のメンバーによる第一次的構築（クレーム申し立て活動）が、社会学者による第二次的構築の対象にほかならないという側面であり、したがって両者の構築の間には、論理階層上の水準の違いがあり、しかも社会学者による分析が、より高次の水準に立つという側面である。第二の側面は、社会のメンバーによる構築が「実践的」なものであり、それに対して社会学者の構築は、「分析的あるいは理論的」なものであるという、構築のもつ性質上の相違、あるいは構築の前提となっている態度の相違という側面である。

では、この二つの側面は、どのように関係しているのだろうか。まず、社会のメンバーは、何らかの事態（スペクターとキツセのいう「想定された状態」）を、「社会問題」として定義づけるような活動、すなわちクレーム申し立て活動を行うと仮定されている。したがってクレーム申し立て活動は、何らかの事態を、「社会問題」として、観察あるいは記述する営みであると言えることができる。ところで、社会のメンバーは、「市井の（mundane）存在論」に基づいた「自然的態度」をとるものと仮定されているので、かれらは、社会問題が、そのような観察や記述とは独立に、客観的に存在していると考えている（と構築主義者は仮定する）。社会学者（構築主義者）は、社会

のメンバーと同じように、あるいはまた社会のメンバーと競合して、観察や記述とは独立に客観的に存在するはずの社会問題を観察したり記述したりする、と考えてはならない。そうではなくて、社会学者（構築主義者）は、社会のメンバーが行う観察や記述、つまりクレーム申し立て活動に注目し、それを研究対象にしなければならない。というのも、構築主義の考えによれば、何らかの行動や状態は、それ自体として存在するのではなく、それを何ものかとして語り（観察・記述し）、定義づけるような相互行為的な活動によって、事実として構築されるからである。

したがって社会学者は、（社会のメンバーによる）観察や記述を、（研究の主題として）観察したり記述したりしなければならない——ここに再帰的な構造があらわれる。イバラとキツセによる再定式化の第一の側面は、このようなものである。だがしかし、これは、事態の半面でしかない。というのも、社会学者による第二次的な観察・記述がどのような性質をもっているかが、問題になるからである。そこで、第二の側面が必要となる。

社会のメンバーは、「市井の存在論」に基づいて、観察や記述とは独立に存在する客観的な状態を観察・記述していると考えている（と構築主義者は言う）のだが、構築主義者は、社会の普通のメンバーのように、そして客観主義的立場をとる社会学者のように、観察や記述と独立して、事態が存在するとは考えない。むしろ、観察や記述こそが、何ものかを事実として構築するのだと考えるのが、構築主義の立場であり、このような態度（客観主義的な態度ではなく、構築主義的な態度）をとることが、イバラとキツセのいう「分析的・理論的態度」をとることであろう。したがって、社会のメンバーによるクレーム申し立て活動（観察や記述）を、メンバー自身の視点（客観主義的な視点）からではなく、分析者の視点（構築主義的な視点）から言い換えること、これが、イバラとキツセによる再定式化の第二の側面である「再構築」ということになる。

つまり、社会のメンバーの視点からみれば、客

14) この問題については、Lynch (2000) も参照。

15) ボーゲンとリンチの議論に基づいたものとして、西阪 (1996) 岡田 (2001) も参照。

観的に存在している「社会問題」を観察・記述しているようにみえるかもしれないが、分析者の視点からみれば、そのような観察や記述（定義づけ）こそが、「社会問題」を社会的に構築しているのだ、というように言い換える＝再構築することだ。そうだとすると、社会学者による第二次的構築は、通常の意味での観察・記述ではなく、このような再構築＝言い換えだということになる。メンバーは、客観主義的に考えているが、分析者は、理論的・分析的に考えるから、違ったように見えるということである。

このように、社会学者が観察・記述するという第二次的構築の部分を、異なる態度による再構築であると考えておかないと、イバラとキツセの議論は、厄介な論争に巻き込まれてしまう。この部分を、あくまで観察や記述だと考えた場合には、社会学者（構築主義者）もまた、社会のメンバーによる第一次的構築を、ある種の客観的な状態として、観察したり記述したりすることになり、客観主義を再び導入せざるをえないという反論が、容易に予想できる。他方、社会学者による第二次的構築もまた、客観主義的な観察や記述ではなく、一つの構築であることを認めて、構築主義を徹底化する（ポルナーのいう「分析的な構築主義」の立場）ことは不可能ではないが、それが、無限背進という論理的困難を伴うことは、周知の事柄である。結局のところ、一方で、どこかで客観主義的な立場を導入すれば、そもそも何ゆえに構築主義が必要なかがわからなくなってしまうし、他方で、構築主義の立場を徹底しても、自らの正当性を掘り崩すことになってしまう。

さて、このように整理してみると、構築主義的な立論の核になっているのは、第一次的構築とは、社会のメンバーが何らかの事態を「社会問題」として語る（観察・記述する）営みだということ、そして構築主義者の見解によれば、このような語り（観察・記述）こそが「社会問題」を事実として構築するのだということ、であることがわかる。言い換えれば、これが、構築主義者による第二次的構築によって再構築された「クレーム申し立て活動」の姿である、と言ってもよい。社会のメンバーの活動としての「クレーム申し立て活動」（何らかの事態を「社会問題」として語る

＝観察・記述する活動）が、「社会問題」を「社会問題」たらしめている過程なのであるから、社会問題の社会学は、まさにこの過程を研究しなければならない、という結論が導かれる。しかしながら、何ものかが何ものかとして構成されるのは、それが何ものかとして語られる（観察・記述される）ことによってである、という構築主義の見解は、果たして正しいものなのであろうか。

いま仮に、社会のメンバーの最も基底的な実践の水準（ないしはその水準に属する実践）を実践<sub>1</sub>と名づけてみよう。この水準は、スペクターとキツセが「想定された状態」と呼んだものの水準であり、後から「逸脱」や「社会問題」がそこにあると認定されたり、されなかったりする実践が属する水準である。そうすると、社会問題を社会問題として定義する活動、すなわちクレーム申し立て活動は、この最も基底的な水準に属する何らかの実践を、「社会問題」や「逸脱」として、語る（観察したり記述したりする）実践であるから、それは、実践<sub>1</sub>を、論理階層上より上位の水準から規定する実践であって、それを実践<sub>2</sub>と名づけることができよう。ここで重要なことは、構築主義者は、実践<sub>2</sub>が、社会問題を社会問題として構築するものだと考えていること、言い換えれば、実践<sub>2</sub>が、社会問題を社会問題として構築する仕方や方法にほかならないと考えているということだ。

しかしながら、かつてハロルド・ガーフィンケルとハーベイ・サックスが「定式化（formulating）」という実践について述べたように（Garfinkel and Sacks 1970）、そしてボーゲンとリンチが実践について語るという実践について述べているように、この実践<sub>2</sub>は、決して実践<sub>1</sub>の外部に立つメタ・レベルの営みではなく、むしろ実践<sub>1</sub>と並ぶ、それと同等の一つの実践に過ぎない。つまり、実践の仕方や方法という問題（行為の「いかにして」という問題）は、その実践を語る（観察・記述する）というメタ的な実践の内にあるのでは決してないということだ。たしかに、「観察・記述」がメタ・レベルの実践ではなく、他の実践と同列の実践であるという点について、構築主義者とわれわれの主張は、一致するかもしれない。問題は、その先である。構築主義者は、

「観察・記述」が、実は構築なのだと言いに言い換えてしまう。われわれが問題にしているのは、まさにこの言い換えである。少なくともそれによって、「観察・記述」以外の実践が、構築に関与している可能性が排除され、「いかにして構築されるのか」という本来の問いが閉じられてしまふばかりでなく、観察・記述＝構築の無限の連鎖という背理を自ら抱え込むことになってしまうのである。

実践<sub>1</sub>が「社会問題」をいわば自ら切り出していく仕方や方法として、実践<sub>1</sub>をメタ・レベルから定義づけていく活動としての実践<sub>2</sub>を考えること、しかも、客観主義から何とか身を引こうとして、実践<sub>2</sub>を実践<sub>1</sub>から切り離して主題化することは、結局のところ、社会問題について語るという異なる種類の実践（それは種類が異なるのであって、決して水準が異なるのではない）を主題化することにほかならない。そして、この新たな主題の領域においても、何ものかが何ものかとして構築される仕方や方法を問うという構築主義的方法が再び適用されれば、社会問題について語るという異なる種類の実践の仕方や方法を問うことになってしまう<sup>16)</sup>。社会問題はいかにして社会問題たりうるのか、という当初の問いが、誤ってクレーム申し立て活動という、基底的な実践を観察・記述するメタ的な実践に向かってしまったために、そしてそれを切り離して主題化したために、社会問題が社会問題となる仕方や方法ではなく、クレーム申し立て活動がクレーム申し立て活動になる仕方や方法に照準してしまうことになっているのではないか。われわれがすでに触れた、主

題のシフト、問題設定のシフトというのは、そういうことである。社会問題の構築主義は、その主題を取り違えてしまったのではないだろうか<sup>17)</sup>。

さて、われわれの出発点は、デュルケームのいう「外部的な関係」をどのように考えたらよいか、という問題であり、そのことはとりもなおさず、「社会的なもの」をどのように考えたらよいか、という問題であった。そしてわれわれが（社会問題の）社会的構築主義の議論を通してたどり着いたのは、少なくとも、「外部的な関係」とは、行為（実践）を外的に観察・記述する（それについて語る）ような別の行為（実践）との関係ではありえないということ、言い換えれば、そのような第二の行為（実践）が第一の行為（実践）を構成（構築）しているわけではないということである。もちろん、だからといって、何らかの「内的な要素」へと逆戻りしようとしているわけではない。たしかに行為（実践）は、「外部的な関係」に依存しており、「社会的に」構成（構築）されている。しかしながら、その構築は、社会的構築主義者が考えているように、その行為（実践）を語る（観察・記述する）別の行為（実践）によって、ではない——社会的構築主義につきまといている、このような表象主義的あるいは認知主義的な残滓こそが、取り除かれなければならないのである。社会的構築主義は、「観察・記述」を「構築」に単純に置き換えることによって、構築そのものへの問いを放棄するばかりでなく、表象主義（的關係）に基づく「再帰性のパラドクス」を引き受けることになってしまったと言ってもよい。このことこそが、われわれがあた

16) もちろんそこで、仕方や方法への問いが再びメタ・レベルへの問いであるかぎり、論理的な無限背進が起こってしまうはずだ。

17) たしかに、例えば「約束」や「告白」などをそのようなものとして構成（構築）する仕方や方法を考える場合と、「社会問題」や「逸脱」をそのようなものとして構成（構築）する仕方や方法を考える場合とでは、決定的な相違があるかのように見えるかもしれない。というのも、後者の場合には、前者の場合と比べて、その意味内容の指定のされ方が、間接化しているかのように見えるからであり、したがってそれが「本当に」社会問題や逸脱であるかどうかを決定するための公共的な言説空間が前提とされるかのように見えるからである。しかしながら「社会問題」や「逸脱」の場合も、ある行為が、まずもって「虐待」や「いじめ」などの個々の行為として構成（構築）されるのでなければならぬということを考慮に入れるなら、両者の間に根本的な相違があると考えることはできない。逆に言えば、「約束」や「告白」についてでさえ、それが「本当に」そのようなものであるかどうか公共的な言説空間で論争となることは、十分にありうるものであって、そのような特性が、「社会問題」や「逸脱」だけの特性であると考えられることはできないであろう。「社会問題」が、それについて語る言説と不可分であることはたしかであるが、やはりそれは、公共的な言説空間そのものの問題なのであって、個々の「社会問題」それ自身の問題ではないように思われる。

かも不可能な選択の前に立たされているかのよう  
な見せ掛けをつくり出していたものにほかなら  
ないのである<sup>18)</sup>。

#### 【文献】

- Best, Joel, [1989] 1995, "Constructionism in Context", Best, Joel ed., *Image of Issues: Typifying Contemporary Social Problems*, 2nd ed., New York: Aldine de Gruyter, 337-354.
- , 1993, "But Seriously Folks: The Limitation of the Strict Constructionist Interpretation of Social Problems", Holstein and Miller eds., 129-147.
- Burr, Vivien, 1995, *An Introduction to Social Constructionism*, London: Routledge. (=1997, 田中一彦訳『社会的構築主義への招待』川島書店.)
- Bogen, David and Lynch, Michael, "Do We Need a General Theory of Social Problems?", Holstein and Miller eds., 213-237.
- Durkheim, Emile, 1933, *The Division of Labor in Society*, New York: The Free Press. (=1989, 井伊玄太郎訳『社会分業論』講談社.)
- Edwards, Derek, 1997, *Discourse and Cognition*, London: Sage Publications.
- Edwards, Derek and Potter, Jonathan, 1992, *Discursive Psychology*, London: Sage Publications.
- Garfinkel, Harold and Sacks, Harvey, 1970, "On Formal Structures of Practical Actions", McKinney, John C. and Tiryakian, Edwards A. eds., *Theoretical Sociology: Perspectives and Development*, New York: Meredith Corporation, 337-366.
- Gove, Walter R. ed., 1975, *The Labelling of Deviance*, Beverly Hills, Calif.: Sage Publications.
- Harré, Rom, 1999, "The Rediscovery of the Human Mind: The Discursive Approach", *Asian Journal of Social Psychology*, 2: 43-62.
- Harré, Rom and Gillett, Grant, 1994, *The Discursive Mind*, Thousand Oaks: Sage Publications.
- Holstein, James A. and Miller, Gale eds., 1993, *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*, New York: Aldine de Gruyter.
- Howard S. Becker, 1963, *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*, Glencoe, Ill.: The Free Press. (=1978, 村上直之訳『アウトサイダーズ』新泉社.)
- Ibarra, Peter R. and Kitsuse, John I., 1993, "Vernacular Constituents of Moral Discourse: An Interactionist Proposal for the Study of Social Problems", Holstein and Miller eds., 25-58. (=2000, 中河伸俊訳「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学』世界思想社, 46-104.)
- Luhmann, Niklas, 1970, "Reflexive Mechanismen", *Soziologische Aufklärung Bd. 1*, Opladen: Westdeutscher Verlag, 92-112.
- , 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp Verlag.
- Lynch, Michael, 2000, "Against Reflexivity as an Academic Virtue and Source of Privileged Knowledge", *Theory, Culture and Society*, 17(3): 26-54.
- 中河伸俊, 1989-90, 「クレイム申し立ての社会学——構築主義の社会問題論の構成と展開(上・下)」『富山大学教養部紀要(人文・社会科学篇)』22(2): 57-73, 23(2): 49-79.
- , 1999, 『社会問題の社会学——構築主義アプローチの新展開』世界思想社.
- 西阪仰, 1996, 「差別の語法——「問題」の相互行為的達成」栗原彬編『差別の社会理論』弘文堂, 61-76.
- 岡田光弘, 2001, 「構築主義とエスノメソドロジー研究のロジック」中河伸俊・北澤毅・土井隆義編『社会構築主義のスペクトラム——パースペクティブの現在と可能性』ナカニシヤ出版, 26-42.
- Parsons, Talcott, 1937, *The Structure of Social Action*, New York: The Free Press. (=1974-89, 稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳『社会的行為の構造(1-5)』木鐸社.)
- , 1951, *The Social System*, New York: The Free Press. (=1974, 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店.)
- Pollner, Melvin, 1974, "Sociological and Common Sense Models of the Labeling Process", Turner, Roy ed., *Ethnomethodology*, Middlesex: Penguin, 27-40.
- , 1978, "Constitutive and Mundane Versions of Labeling Theory", *Human Studies*, 1: 285-304.
- , 1993, "The Reflectivity of Constructionism and the Construction of Reflexivity", Holstein and Miller eds., 199-212.
- Potter, Jonathan, 1996, *Representing Reality: Discourse, Rhetoric and Social Construction*, London: Sage Publications.
- Schutz, Alfred, 1971, *Collected Papers I*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers. (=1983, 渡部光・那須壽・西原和久訳『社会的現実の問題 [I]』マルジュ社.)

18) われわれは、別のところで、「社会的なもの」「外部的な関係」のありようとして、それが相互行為において(「語られる」と対比的な意味で)「示される」という考え方を提起しておいた(田中 2002)。

- Spector, Malcolm and Kitsuse, John I., *Constructing Social Problems*, New York: Aldine De Gruyter, 1987. (=1990, 村上直之・中河伸俊・森俊太訳『社会問題の構築——ラベリング理論をこえて』マルジュ社.)
- 田中耕一, 1990, 「社会的行為」安藤喜久雄・児玉幹夫編『社会学概論』学文社, 19-36.
- , 2002, 「規範と心——実践的行為の構造」『関西学院大学社会学部紀要』91: 71-85.
- Woolgar, Steve and Pawluch, Dorothy, 1985, “Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problems Explanations”, *Social Problems*, 32 (3): 214-227. (=2000, 平英美訳「オントロジカル・ゲリマンダリング」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学』世界思想社, 18-45.)
- Zimmerman, Don E. and Pollner, Melvin, 1971, “The Everyday World as a Phenomenon”, Douglas, Jack D. ed., *Understanding Everyday Life*, London: Routledge & Kegan Paul, 80-103.

## The Myth of Reflexivity: The Possibility and impossibility of social constructionism

### ABSTRACT

The insight that the meaning of an action is not determined by its intrinsic property, but is socially constituted through its interaction with others' action, which the labeling theory of deviance suggested, is closely related to the problem of how we should think about the nature of "the social". This insight, however, has been obscured with the decline of the labeling theory resulting from its controversy with the positivistic approach. Following the tradition of the definitional approach, Spector and Kitsuse proposed the social constructionist approach to social problems.

In this paper, in order to accurately understand the nature of "the social" or the meaning of "being socially constructed (constituted)", we will examine (1) the constructionist program of Spector and Kitsuse, (2) the criticism of "ontological gerrymandering" by Woolgar and Pawluch and the reformulation of "strict constructionism" by Ibarra and Kitsuse, (3) the argument of Pollner in favor of reflexive observation or description, and that of Bogen and Lynch against reflexivity.

It should be noticed that although Pollner assumes a sociologist's reflexive observation or description (taking the theoretical or analytical attitude) of a member's observation or description (taking the natural attitude), the natural attitude, as Bogen and Lynch argue, includes every attitude and there is no standpoint from which we can observe or describe the natural attitude entirely.

It is concluded that an action is socially constructed (constituted) as such not through being "referred to" (observed or described) as such by others on the meta-level. We should regard "the social" as involved in the realm of not being "referred to" but being "displayed" (in Wittgenstein's sense) in social interaction.

**Key Words:** reflexivity, social constructionism, social problems